



パリ、ペールラシューズ墓地にあるアベラールとエロイーズの墓（中島撮影：1997年）

- ユーグの生涯はほとんど知られるところのないもので、彼について語られた逸話もほとんどないが、彼の思想には強い個性的なスタイルが刻印されている。
- ユーグが説いたのは、「すべてを学びとれ、時がたてば学んだことの一つとして無駄なことはなかったと知るときがくるだろう」（162頁）ということであり、彼はそれを、学生たちにユーモアを交えて説き、同僚たる教師たちにも笑いのムードをかもし出すよう推奨している。
- ユーグの教えは、その死後、彼の修道院を越えて広がっていき、ドミニコ会のアベラー

ル²²、その弟子トマス・アキナス²³、フランシスコ会のハーレスのアレクサンダー²⁴、そして、ボナヴェントゥラ²⁵等に影響を与えている。また、キルケゴールが目にとり、引用した、数少ない中世の思想家の一人でもある。

○ユグが、もっとも広く影響を及ぼしたのは、その著書『学芸論=ディダスカリコン (Didascalicon)』を通してであり、この本は教科書として使われた。

○イリイチによれば、「十二世紀の中頃という時代は、過去の著作のもつ支配力が自然に終わりになりつつあることに学者たちが確信をもてた、歴史上まれにみる重要な時期」(163頁)であり、思想家たちは、過去の思想的達成を意のままにできる快適さを感じ始めた時代であった。

○聖ベルナルド、アベラール、そしてユグといった人々は、まったく新しい種類の時代精神を代表しており、完全に伝統を消化し、新しい綜合を自由に創造できると感じていた思想家たちであった。

○この時代、まだアリストテレスの著作はアラビア語から翻訳²⁶されておらず、アラブのアリストテレス注釈者も知られていなかった。

○この風の中に、西欧の偉大な教科書、ペトルス・ロンバルドゥス²⁷の『文章術』(1150年)、グラティアヌス²⁸の『教令集』(1140年)、そしてユグの『学芸論』(1127年頃)

²² ドミニコ会のアベラール、Albertus Magnus(1193年頃-1280年)は大聖アルベルト(St. Albert the great)、ケルンのアルベルトゥスとも呼ばれる13世紀のドイツのキリスト教神学者。アリストテレスの著作を自らの体験で検証し注釈書を多数著す。錬金術を実践し検証したこともその一端である。カトリック教会の聖人(祝日は命日にあたる11月15日)で、普遍博士(doctor universalis)と称せられる。ピウス10世によって教会博士の称号を与えられている。

²³ トマス・アキナス、Thomas Aquinas,(1225年頃-1274年)は、中世ヨーロッパ、イタリアの神学者、哲学者。シチリア王国出身。ドミニコ会士。『神学大全』で知られるスコラ学の代表的神学者である。カトリック教会と聖公会では聖人、カトリック教会の33人の教会博士のうちの1人。

²⁴ ハーレスのアレクサンダー、Alexander Halesius(1170/1185-1245年)はイギリス出身のフランスのスコラ学者、フランシスコ会修道士。パリ大学で神学を講じ、Doctor irrefragabilis(反駁しがたい博士)と称された。フランシスコ会学派創始者の一人。

²⁵ ボナヴェントゥラ、Bonaventura(1221?-1274年)は、13世紀イタリアの神学者、枢機卿、フランシスコ会総長。本名ジョヴァンニ・デ・フィデンツァ。トマス・アキナスと同時代の人物で、当代の二大神学者と並び称された。フランシスコ会学派を代表する人物の一人で、当時の流行だったアリストテレス思想の受容には批判的だった。カトリック教会の聖人。

²⁶ このアリストテレスの著作のラテン語への翻訳については、諸説あるようで、今ひとつ詳らかでない。ルーベンスタインは、アリストテレスのラテン語への翻訳にはアラビア語訳アリストテレス全集が重要であったという(『中世の覚醒—アリストテレス再発見から知の革命へ』リチャード・E. ルーベンスタイン(紀伊国屋書店 2008年3月))。一方、K.リーゼンフーバーは、「ラテン的な西方キリスト教世界が、アラブ人の科学と哲学、およびアリストテレスの著作といったアラブ世界の知的富をスペインのトレドやシチリアのパレルモで活躍した翻訳者たちを通じて受け入れ、消滅から救ったのは、ちょうどこの時期であった。また、十二世紀後半からは直接ビザンティンからもギリシャ哲学の原点がもたらされ始め、それらのラテン語訳も行われた」としている(『西洋古代・中世哲学史』クラウス・リーゼンフーバー(平凡社、2000年8月))。これに対して、直接ギリシャ語からの翻訳を、12世紀前半にヴェネチアのジェームスが行ったという説がUSAのAmazonのルーベンスタインの著書の書評欄に書き込まれている。

²⁷ ペトルス・ロンバルドゥス、Petrus Lombardus(1100年頃-1160年)は、カトリック教会の司教、スコラ神学者。「Magister Sententiarum」(教師、教法先生、命題集の師)として知られる。イタリア語名でピエトロ・ロンバルド(Pietro Lombardo)とも呼ばれる。教父たちの著述を注解した『命題集』は中世における神学の教科書として広く用いられた。トマス・アキナスの『神学大全』は彼を特別に教師と呼んでいる。オッカムの剃刀で知られるオッカムのウィリアムは『命題集』を批判的に分析した。

²⁸ ヨハネス・グラティアヌス、Johannes Gratianus(1100年?-1150年?)は、12世紀のボローニャの法学者。そ

が書かれている。これらのテキストは、実に十七世紀に至るまで使われ続け、自由七科²⁹を基礎とする教育を求めた人々にとって必須の教本となった。文法書を別として、これらの書物は、学校の教本として実に永い寿命を保ったのである。

- イリイチは、このような長期間に渉る名声を獲得していたユークの機械論的なサイエンスに関する独創的な思想が、その後忘れ去られてしまったことには重大な意味があると考えている。
- 「彼（ユーク）は機械論的なサイエンスを、身体の弱さを癒す方法を追求する哲学の一部として定義した。そのような身体の弱さは、人間が引きおこした環境の破壊に起因しているから、したがってサイエンスとは、エコロジーにおける混乱を改める手段ということになる。」（165 頁）
- イリイチによると、ユークは人間の起源についての物語を創世記に関連させて受けとめており、創世記に示されている神による人間（アダムとイヴ）及び世界の創造は、それぞれの物が本来有する美に即応して行われたと固く信じていた。「このように、美を強調し、現実を視覚的にとらえる見方を強調するのが、ユークの特徴だといえる。彼はアダムとイヴそれぞれに、三対の眼を与えた。第一に、日常のものを見る身体の眼、第二に、見る人にとっての永遠の美の意味を深く考える理性の眼、そして第三に創造主自身の意図におのずと一致する眼である。（中略）ユークにとって、これらの三対の眼に赤々と火をともしたのは神聖な光であって、この自然のなかに映し出される。つまり鏡に映し出された魂と天との関係であって、この鏡が人間だということになる。」（166 頁）
- エデンの園に生えていた、一般に「知恵の木」として知られる木は、ヘブライ語で *jadah* の木と呼ばれ、知識・侵犯・権力・所有などの意味を含んでいるが、アダムとイヴの高貴な位置を妬んだ蛇はイヴを唆して木の実を取らせた訳だが、ユークは、アダムは好奇心にかられたのではなく、イヴを想う深い愛 (*affectus dilectionis*³⁰) から、彼女の差し出した実を食べたと主張している。
- 結果として、人間の眼の鏡はくもり、恥を感じるようになり、自然も呪われ荒廃した。
「エデンの園の庭番として神に創造された者たちは、今や子宮で生まれて生まれ落ち、アザミの生い茂った畑から必要な生活の糧を得なければならなくなった。」（167 頁）
- ユークは、このような「エコロジーの歴史的な理解を彼のサイエンスの一般理論の出発点

の生涯の詳細は定かでなく伝説に包まれている。数多くの教令を精選し、これに解説をつけた『矛盾教会法令調和集』(*Concordia canonum discordantium*)を出版し、教会法を理論的に体系化したことから、カノン法学の父と呼ばれる。「矛盾教会法令調和集」は後に『グラティアヌス教令集』(*Decretum Gratiani*)と呼ばれるようになって権威付けされ、大学で、カノン法とローマ法の双方を修めた「両法博士」(*doctor utriusque juris*)は西欧諸国で通用する大変権威あるものとなった。

²⁹ 自由七科 (*liberal arts*)とは、ギリシャ・ローマ時代に理想的な源流を持ち、ヨーロッパの大学制度において中世以降、19 世紀後半や 20 世紀に至るまで、人が持つ必要がある技芸(実践的な知識・学問)の基本と見なされた自由七科のことで、具体的には文法学・修辞学・論理学の 3 学、および算術・幾何(幾何学、図形の学問)・天文学(円運動についての学問、現在の地理学にも近い)・音楽(ここでいう音楽は現代の定義の音楽とは異なる)の 4 科のこと。

³⁰ *affectus* は「感情」、*dilectionis* は「愛」を意味するラテン語。

に据えた。」したがって、サイエンスは、この苦痛に充ちた状態を癒そうとする探求行為となり、そこで第一に強調されなければならないのは「人間の弱さへの救済の試み」ということになる。

- ユークのメタファーは信仰の時代にこそ似つかわしいものではあったが、彼にとってエコロジーは一つの前提であった。ところが R&D は、エコロジーを、それとは逆に科学的仮説に基礎を置くものとして捉えている。
- ユークの哲学（ただし、中世ラテン語における *philosophia*³¹の意味は現代英語の *science* に余程近いとイリイチは言っている）の一般理論は、『学芸論 *Didascalicon*』と『哲学についてのディンディムス (*Dindimus*) の対話』という二つの著作で展開されている。
- 後者は、バラモンの王ディンディムスと、南スペインの伝説に名を残すインダレトウス、使徒行伝に名を残すユダヤ人會堂司ソステネス³²の対話劇となっており、イリイチは、ユークが正しさを立証したいと考えていた主張は、当時の多くの人々を傷つけずにはすまないものだったので、このような奇妙な人物配置を採用して、信仰のドグマに訴えかけることなく、サイエンスのエコロジー的な基礎に一貫性を与えようとした試みとなっているという。「ディンディムスという人物にユークが課した役割は、哲学ないしサイエンスを統合する基準を説明させること、および、その内部に機械論的な技術を位置づけることであった。」(171頁)
- ユークは、サイエンスは三つの主要な目標をもっている、として次のように記している。

³¹ ユークの『学芸論』では哲学(*philosophia*)を次に示すように規定している。「哲学は、知への愛、探求、そして友愛でもある。ここでいう知とは、なんらかの鉄器具、あるいはその他の道具についての学識や精通を意味するのではなく、何ら不足することのない、活力ある知性と事物についての根源的な唯一の道理をいう。さらにこの知への愛は、理解力をもった魂がその純粋な知によって照らされることを意味し、またある意味で、おのれ自身への引き戻し、呼び戻しでもある。知の探求はこうして、神的なものへの、その純粋な精神への友愛であると考えられるのだ。したがってこの知は、あらゆる種類の魂に、その神的な価値を与え、力と純粋さとをその本来の性質に戻すのである。ここから、思考と認識の真理が生まれ、神聖かつ純粋な行為の清純さが生まれる。」(『*Didascalicon*』、第一部第二章「哲学は知の探求である」)また、「すなわち、哲学は人間と神のあらゆる事象の道理を十全に探求する学問なのである。先に述べた「哲学とは知への愛、知の探求である」ということを変更する必要はない。この場合の知とは、建築学、農学、その他の実学によって説明されるものではなく、事象の根源のみを思惟する知である。同じ行動であっても、その道理に即するならば哲学に関与するし、その管理に即するならば哲学から排除される。今の場合ならこう言おう。農学の道理は哲学の領域にあり、その管理は農民の領域にある。さらに、人工物はたとえ自然のものではないにせよ、自然を模倣しており、それが模倣する自然の規範的な形を道理として表している。ゆえに、哲学をあらゆる人間の活動に広げることがわれわれの義務であり、哲学にふさわしいとされる事象の数だけ哲学の部門を設ける必要があることは、道理に適っていると理解できるだろう。」(『*Didascalicon*』、第一部第四章「いかなる事象が哲学に関与するか」)

http://www.medieviste.org/archive/versio/Didas_1.html

³² 『使徒行伝 18』ところが、ガリオがアカイアの地方総督であったとき、ユダヤ人たちはパウロに対していっせいに立ち上がり、彼を裁きの座に引き出して言った、「この男は人々を説得して、律法に反する仕方て神を崇拜させようとしています」。しかし、パウロが口を開こうとすると、ガリオはユダヤ人たちに言った、「ユダヤ人たちよ、もしこれが実際に不正行為とか悪意のある犯罪行為であれば、わたしは当然お前たちを我慢するのだが、問題が教義や名称や律法に関することであれば、自分たちで解決せよ。わたしはそのような事柄の裁き人になりたくない。」彼らを裁きの座から追い出した。すると、ギリシャ人たちはみんなで会堂長ソステネスを捕まえ、彼を裁きの座の前で打ちたたいた。ガリオはそうした事を少しも気にとめなかった。Japanese Public Domain Bible, courtesy <http://denmo.org>

——英知、美德、そして必要性への対応能力の三つである。英知とは、物事をあるがままに理解する力のことである。美德とは、心の習慣、つまり自然の導くままに理性とのあいだに調和をつくりだす習慣である。ネケシタス (Necessitas) とは必要性に直面する能力のことだが、この能力は、それなしにはわれわれは生きることができず、しかも、それがなければわれわれはもっと幸福に生きることができるかもしれないといった能力なのである。これら三つのものは人間の生活を支配している三つの悪にたいする治療法となっている。すなわち、無知にたいする英知、悪徳にたいする美德、そして身体の弱さに対する強さという能力である。(後略、171～172 頁)³³

- これに対してイリイチは、ユークが、無知からの救済手段としての理論的サイエンス、悪徳 (道徳の弛緩 *vitium*) からの救済手段としての倫理学や社会科学＝人を美德に導く実践の学 (*practica*)、自然の侵害という逸脱からの救済手段としての機械的サイエンスを指摘したことを通して、「理論 (*theorica*)、実践論 (*practica*)、機械論 (*mechanica*) の三者が、人間の脆弱さを治療・救済する方法なのである。」(173 頁) と説いている。
- イリイチは、「ユークは技芸 (*arts*) とサイエンスの発明を、人間というものにおけるある種の欠如と結びつけた最初の人」であったと観ており、サイエンスを人々の弱さを治癒する方法と定義し、人間の行為によって損なわれた環境の中で、なお人が生存し続けるためには、このサイエンスに関わっていかなければならないという思想は、ユークの独創に帰せられるべきものだと説いている。
- だが、ユークの思想が人々の中に生き続けたのは、同時代の他の著書に比べるときわめて短い時間だった。それが最後に人の口の端に上ったのはユークの死 (1141 年) から 80 年後のことだった。
- ユークの唱えたサイエンスは、現在西欧社会で支配的な科学観とは正反対の捉え方であり、その違いを明確に捉えるためには、ユークの使用したフィロゾフィアという用語に拘るべきだとイリイチはいう。
- サイエンスをフィロゾフィア (哲学) として語るとは、ディンディズムがいうように「すでに知られつくしていることをいつくしむ愛によって動機づけられるのではなく、おいしさを味わい、楽しいとわかってきたことのさらにその先を追及しようとする欲求によって動機づけられた、治癒への関心に支えられた真理の探究」(174 頁) として語ることを意味する。
- イリイチは、今日、このような態度に対する適切な名称を見出しがたいとして、唯一〔コンヴィヴィアリティの探求〕を相応しい名称としてこれに差し向けている。それこそが、ユークが唱えた「人間が破損した環境に永久にとどまり続ける運命を担った人間が、みずから招いた弱さを癒し回復するための批判的な探求行為として定義」(175 頁) され

³³ 『学芸論』では「この生き物(人間)の必要に役立つ行為は三種類ある。まず第一に、自然の滋養を管理すること、第二に、外部から生じうる問題から保護すること、第三に、すでに生じている状況への治癒をもたらすことだ。」と述べている(『Didascalicon』、第一部第八章「人間はどのような点で神に似ているのか」)
<http://www.medieviste.org/archive/versio/Didas I.html>

るものだというのである。

- この治療法としてのサイエンスとともに、ユークの言説がもたらした第二の貢献が、機械論的サイエンス (*scientiae mechanicae*) を哲学の中に位置づけたことである。
- この機械論的サイエンスは、人間の身体の弱点を具体的に治療するための方法論的省察から構成されており、それは、機織 (*lanificium*)、金工 (*armatura*)、交易と輸送 (*navigatio*)、農業 (*agricultura*)、交通 (*venatio*)、医療 (*medicina*)、演芸 (*theatrica*) の諸部門から構成されているという。
- ディンディムスは、これらの技芸のそれぞれに英知が隠されているとして、次のように述べている。

——あらゆる生き物は、それぞれにうまく合った鎧を身につけて生まれてきた。ただ人間だけが無防備で、裸のままこの世に生まれる。他の生き物が生まれながらに持っているものを、人間はことさらに発明しなければならない。自然を模倣し、理性をとおしてみずからの身を鎧うことによってかえって人間は、環境を切り抜ける装備を身につけて生まれる以上に、輝かしい前途を切り拓くことになるのだ。(176頁)
- イリイチによると、ユークの神学上の著作は、「人間の罪深さの感覚と贖罪観とに色濃く染まっていた」が「だからといって彼は運命を甘受せよと説くこともなかったし、自然を人間の支配下に組み敷けと檄をとばすこともなかった。」という。
- むしろユークは、人間と環境との不調和に、人間に対する挑戦を読み取っており、その挑戦は自然を模写した人工物を創ってみよという呼びかけと捉えていた。
- この人工物はいわば松葉杖として人に仕えるが、このような支えを建造する作業におのずと含まれる英知を研究する行為が、ユークによって「機械論的サイエンス」と呼ばれているのである。
- 「機械論的」(*mechanical*) の語源はギリシャ語の *mēchanē* にあるが、古典時代のギリシャ人にとって、機械論的な技芸は、奇跡・魔術・詐術によって自然を出し抜く手続きだった。ギリシャ語が地中海世界の交易語として広く用いられるようになると、*mēchanē* は人を驚かすものを意味するようになり、それに対して *fabrica* という言葉が、まっすぐなもの、普通の手細工や建造物を意味するようになった。そして、ラテン語(ローマ人)はけっしてこの用語(*mēchanē*)を採用しなかったし、それと同等の語をつくり出すこともなかった。ローマ人は「(新たな)テクノロジーを何ら必要としなかったのである。」(178頁)
- 古典古代の後期には、*mēchanē* という用語はほとんど用いられず、わずかにセビリアのイシドロス³⁴によって保存され、中世に受け継がれた。イシドロスにとって機械学は、みずから利用するためにまたは市場向けに「ものを作ること」における思考媒介的

³⁴ セビリアのイシドロス、San Isidoro de Sevilla (560年頃-636年)は、中世初期の神学者で、後期ラテン教父の中でも最も重要な神学者の一人であり、30年以上セビリヤ大司教を務めた。中世のヒスパニアの地域で書かれた後の歴史書はすべて、このイシドールスの歴史を範としていた。現在、カトリックでは「インターネット利用者およびプログラマー」の守護聖人となっている。

な過程を意味した。

- 次にシャルルマーニュ大帝の時代に、学者たちはこの用語を、はじめて自然の模倣物を人工的に創り出す人間活動を指すものとして、明示的に用いた。法王シルヴェステル二世となったオーリヤックのジェルベール³⁵は、機械論的な技芸は天球全体の複雑な運動を説明する公式を表したものだ、と唱えた。
- 中世において *mēchanē* は占星術 (*mathesis*) の片割れのようなものになったが、ユーグの時代のスコラ学的用法では、自然を模倣した人工物を作ることという意味で定着しており、ユーグは、そこに実用的な技芸と英知との関係を探査することになる。
- ユーグ以前に「機械論的」ということばを用いた者は、きまってこの語を技芸と結びつけて機械論的技芸と記したが、一人ユーグのみはこの用語をサイエンスと結びつけ、機械論的サイエンス (*scientiae mechanicae*) と記した。彼はそれについて語った最初の人である。
- 「ユーグは、真理を映す鏡として技芸を分析することをとおして、技芸に映し出されているものと天地の万物および人間の魂に映し出されているものとのあいだに、本質的な差異を設けた。自然と魂とは神が創造した媒体に真理の光を映し出している。(中略) 機械論的なサイエンスは、神の本性をまねて芸術家がつくった媒体、それゆえに一部自然で一部人間の業でもある鏡の中に、神と同じ光の反射を求める。機械論的なサイエンスは、人間の弱さを実際に癒す治療法として貢献できる研究である限りは、それは神の創造について研究するのではなくて、やはり人間の業を研究するのである。」(180～181頁)
- このようなユーグの着想も考え方も、ユーグの生涯より長生きすることはなかった。その考え方はユーグの著書の中でもっともポピュラーで、ルネサンスの時代にまで読み継がれていった『学芸論』にも明示されているのに、ユーグの読者たちは彼の考えを取り上げなかった。イリイチは、その原因の一端を、ユーグの時代におけるテクノロジーの急速な発達に求めている。
- 十字軍の開始による武器需要の増大、それに伴う北西ヨーロッパにおける鉄の消費量の倍増、水車利用の進展等により、まさに機械論的技芸は花盛りの時代となり、ユーグの死後二世も経ると、風車と大学がヨーロッパ中に広まっていたが、「その頃教育を受けた者たちは庶民の職や機械学を学問的な主題として取り上げ、語ることはなくなった。」(182頁)
- 機械学を業とする者は、この時代には稀な賃金労働者の萌芽的形態を示しており、後の大量生産の最初の現代的な形態に関係していった。「機械学」という用語はこの頃までにはもう自然を出し抜くことではなくなり、まして自然を模倣することからは縁遠い

³⁵ シルヴェステル二世、*Silvester II* (950年?-1003年)は、フランス人初のローマ教皇(在位:999-1003年)。本名オーリヤックのジェルベール(仏:*Gerbert d'Aurillac*)、ラテン語名ゲルベルトゥス(*Gerbertus*)。千年紀をまたいだ教皇であり、数学者・天文学者として10世紀の西欧世界において傑出した人物であるといわれている。

ものとなっていた。そのことばの意味はいまや自然を開発＝搾取することに近付き、すでに自然を支配する方向へと徐々に進んでいた。」(183頁)

- このようにして、ユークの機械論的なサイエンスは忘れ去られ、新しい科学は、民衆によるサイエンス(ユークの自然の模倣において働く英知の追求)とはまるで正反対のものとして概念構築がなされた。「新しい学科は明らかにエンジニアリング(工学)の科学、すなわち民衆のための生産に関わる科学であった。」
- イリイチは、「道具としての道具のサイエンスは英語に固有の名称を持っていない。「テクノロジー」ということばはそれを示すのにふさわしくない。」という。
- 英語のテクノロジーは、道具それ自体を指したり、専門技術化された役割を示すために使われたりしており、それは現在世界中に流布しているが、ごく最近に至るまでドイツ語やフランス語ではそうでなかった。
- ジャック・エリュールは、テクニクスとテクノロジーを区別して用いていたが、その際のフランス語の「テクノロジー」は、人間と道具との間の関係を批判的に分析することを意味していた³⁶。イリイチはこれに倣って「批判的テクノロジー」という言い方を提言している。
- 古代以来、道具は広範に利用され、他の道具との比較において効果を考えられてきたが、それを理論的に重要な問題として、明示的かつ体系的に考える者はいなかった。ユークの時代に至って、はじめてテクニクスについて批判的な問いかけが始まったのである。
- ユークの時代は、同時に激しい技術革新とエコロジー的侵害の幕開けでもあった。その状態の中でユークの機械論的サイエンスの発想が現れ、「人間生活の自立と自存(サブシステム)の基礎を支えるように道具を革新する可能性がある」という理論的な主張

³⁶ エリュールの『技術社会』(La technique ou l'enjeu du siècle、すぐ書房、上下巻、1975、1976年)は、現在、科学技術社会論(STS)や技術哲学の領域で、無視できない一つの参照枠となっている。同書でエリュールは、グローバルな拡張力を持つ「技術」のダイナミクスが社会のあらゆる領域の隅々にまで浸透し、人間存在がその構造連関に強制的に組み込まれていく事態を描写した。技術の「自律性」、その自己推進的・自己産出的な発展力に対してほぼ全面的な「否」を投げつけるその主張は、現代における人間存在の「水平化」を批判したキルケゴール、資本主義社会における人間疎外の問いを鋭く洞察した青年マルクス、近代社会の合理化のパラドクスをいち早く冷徹に透視したヴェーバー、近代の「啓蒙」と「野蛮」の弁証法を剔抉したホルクハイマーとアドルノなど、モダニティの行方を根底から問うた思想家たちの思想と符節を合わせている。

『技術社会』は、1954年の刊行当時のフランスではほとんど反響を呼ぶことはなかった。その十年後、64年にロバート・マートンの序文が付された『技術社会』英訳版が、『すばらしき新世界』の著者オルダス・ハクスリーの肝煎りで刊行され、同時代のアメリカで啓発的な技術批判の書として、セオドア・ローザック、ヘルベルト・マルクーゼなどによる一連の体制批判の書物と並んで、広く注目を集めるに至った。技術の自律性と人間のエージェンシーの喪失を主題とするエリュールの思想は、現代社会の基本的性格とそこで人間が置かれている条件を考察するための、様々な糸口を与えるものであった。

だが、その一方で、エリュールの仮借ない社会批判は、技術社会の袋小路からの明朗な抜け道やその手がかりを与えず、具体的な問題に対するプラグマティックな取組み、漸次的な社会改良への志向も基本的に欠落させているとして、しばしば激しい憤怒をも引き起こした。例えば、著名な未来学者アルヴィン・トフラーは、その著『未来の衝撃』の中で、エリュールを「一群の未来憎悪者と技術恐怖症患者」の「最も極端な」論者、「フランスの宗教神秘家」として一蹴している。現在でも、社会構築主義(社会構成主義 social constructivism)の立場からテクノロジーを論じる STS 論者の間では、一般にエリュールの技術論はテクノロジーの自律性と拘束力を不当に誇張した技術決定論の典型と見なされる傾向にある。(以上 Wikipedia における論評)

と、それがサイエンスの目的たるべしという道徳的な主張」(186 頁) がなされるに至ったのである。

- そして、十二世紀の思想家と十三世紀の思想家の間には、両者を「スコラ学者」と一括して考えるには無理がある断層が存在する。それはアラビア語の写本からのギリシャの哲学者たちの文献の翻訳であり、それによって、全く新しいサイエンスの考え方が一般化する。
- サイエンスは、物の動因を探求することとみなされるようになり、そこに生じた技術に対する新しい態度は、C.S.ルイス³⁷がいうように「ある者たちが自然を道具として他の者たちを支配する権力になった」(187 頁) というのである。
- ユーク以降の批判的テクノロジー(それを標榜する者をイリイチは「批判的テクノロジスト」と呼ぶ)は、1130 年の時点でも、今日でも舞台の瀬戸際に立っているが、その立ち位置は大きく異なっている。ユークが向き合っていたものは伝統的なナイーブさであるが、今日のわれわれはフランシス・ベーコン的なものの見方に直面している。
- ベーコンにおいては「技芸とサイエンスの進歩は自然への支配を達成することを意味する。」(188 頁) のであり、ベーコンは「近年の機械の発明はたんに自然の歩むべき行程を優しく示してやる道案内の役目を果たすだけではない。それは自然を征服し、服従させ、根こそぎ揺り動かす力を持っている」と信じていた。
- 1970 年代の今日、ベーコンは身代わりで鞭打たれる者となった。しかし、彼のスタイルは時代遅れのものとなったとはいえ、その全般的な楽観主義は生き残り、今日の R&D は媚びによる自然の誘惑をめざしている。それは、「外的な自然を制御しようとするサイエンスから、人々に対して自己規制を巧妙かつ効果的に押しつけうる方法の探究へと転じてきたのである。」(189 頁)
- 「ユークの批判的テクノロジーは忘れられてしまい、彼の著作は後のスコラ哲学のたんなる基礎づけに役立てられることになるわけだが、それと同じように、民衆によるサイエンスも、進んだエコロジー志向をもつ R&D の説教用の道具へと転じてしまう危険がたえずある。人間とはまずもって労働者と消費者であり、彼らのために専門家は専門的な調査研究を行わなければならない、とするイメージを逆転させるところから出発する場合にのみ、民衆によるサイエンスは、本来の課題と目標とに忠実でありつづけるのだ。私たちがこのことを明確に認識しない限り、民衆によるサイエンスの墮落は必至である。」(190 頁)

³⁷ クライブ・ステーブルス・ルイス、Clive Staples Lewis(1898-1963 年)は、アイルランド系のイギリスの学者、小説家、中世文化研究者、キリスト教擁護者、信徒伝道者。著作には詩集、神学論文集など多数のものがあるが、特に有名なものは『ナルニア国ものがたり』全 7 巻。

6 シャドウ・ワーク（191～226頁）

- ナディン・ゴルディマー³⁸の小説『バーガーの娘』の主人公は「健康で人並みの生活を送るという、他の人々の苦しみともなる条件に眼をつぶることができない」という「病い」に苦しんでいる。
- アン・ダグラスは、『アメリカ文化の女性化』³⁹で、同じような指摘を行っている。彼女にとって「病い」とは感性の喪失であり、その感性は、産業社会は、自らが大事に育てている価値それ自体を破壊しているのではないか、ということと言い切れる感性である。
- 産業社会のこのごまかしほどひどいものはほかにない。イリイチは、ここでそのような産業社会の機制を「アパルトヘイト」に擬えている。⁴⁰「このアパルトヘイトこそ、いまも現にあり、また革命の後にも現れるものであろう。」（191頁）
- イリイチは、なぜ産業社会において、このような隔離体制が避けられないのかという理由、いいかえれば、稀少性⁴¹の仮定の上につくられる社会は、なぜセックスや肌の色、資格や人種、党派性等に基づく隔離体制なしに存在し得ないのかという理由を探求したいと考えている。
- イリイチは、自分のテーマとして、産業社会の影の面、とりわけ労働の影の面をとりあげてきたが、それは支払われない労働である。男と女は共に自らのサブシステム⁴²を支払われない労働によって維持し、更新してきた。
- だが、イリイチがここで問題としているのは、産業社会が財とサービスの生産を必然的に補足するものとして要求される、支払われない労働である。この種の支払われない労働は、賃労働と相補的に、サブシステムを奪い取るものとして機能する。イリイチは、このような賃労働を補完する支払われない労働を〈シャドウ・ワーク〉と呼ぶのである。そして、そのような〈シャドウ・ワーク〉は、産業社会のイデオロギーによって隠されている。
- 〈シャドウ・ワーク〉の本質をつかむためには、それがサブシステム（人間生活の自立・自存）の活動ではないことと、それが支払いのよくない賃労働ではないことを十分

³⁸ ナディン・ゴルディマー、Nadine Gordimer(1923-2014年)は南アフリカの作家。1991年にウオーレ・ショインカに次いでアフリカ人で二人目となるノーベル文学賞を受賞した。『バーガーの娘』Burger's Daughter (1979)は、1970年代の半ばという時代設定で、南アフリカ政府を転覆しようとしている反アパルトヘイトの白人活動家グループを描いた小説のようである。

³⁹ Douglas Ann. The Feminization of American Culture. New York: Knopf, 1977.

⁴⁰ 余談になるが、このような産業社会の忌むべき機制は、今の日本の政治的言説の世界にも満ち満ちている。3.11以降の原子力発電をめぐる政治的言説や、つい先ごろ起こった Islamic State における日本人人質事件をめぐる幼児のような日本政府の対応と、それを批判する言説を押さえ込もうとする戦前の言論統制紛いの政府・マスコミが翼賛した様態等、今やそれは見るも無残な状態にある。

⁴¹ 原注 232～234頁。この稀少性の歴史に関する主要な参考文献として、イリイチは、ポール・ドゥムーシェルとジャン・ピエール・デュピュイの共著『物の地獄』(L'enfer des choses, 1979)を挙げている。

⁴² 原注 246頁。イリイチは、ここでは本当はヴァナキュラーな活動とヴァナキュラーな領域について語りたいようだが、この短い文章の中だけで、そのヴァナキュラーという概念を読者に熟知させることは期待できないので、この論文では「サブシステム」に固執したいと述べている。